詩集

广山敬彦著作集 1

詩

集

片山敏彦著作集　第一巻

片山敏彦著作集　1
© 1972 Misuzu Shobo

1972年4月20日　第1刷発行

¥900.

著　者　片山敏彦（かたやま としひこ）

東京都文京区本郷3丁目17-15
発行者　北野民夫

東京都新宿区改代町24
印刷者　田中昭三

発行所　東京都文京区本郷3丁目17 郵便番号113
株式会社　みすず書房
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

(第7回配本)　理想社印刷・鈴木製本

I

「朝の林」「暁の泉」「片山敏彦詩集」より

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

母

これはかりんの樹だ。
私が生れない前から私の家の庭にある一本のかりんの樹だ。
春には淡桃色の貝殻のやうな華奢な花々を明るいエメラルド色の葉の間にちりばめ
夏から秋へかけて大きい金色の、でこぼこのある堅い果實を枝に垂らすかりんの樹だ。
私はこの優しみのある明るい樹木に、稚いときから特別の愛を持つてゐる。

今は春の四月。私はこの樹を見あげる。
豐かな梢の背後(うしろ)には甘美な、底光りする春の空が夢を見てゐるやうに擴がつてゐる。
私はこの樹の周りを歩く。
地には貝殻のやうな淡紅色のかりんの花びらが散り敷いてゐる。
私はうつむいてそれを拾ふ。
しかし私の心は重苦しい。
あそこの太陽(ひ)の當つた障子の内部(なか)に死に近づく母が病氣と戰つてゐるのだから。

私は室にはひる。
母は苦しんでゐる。眼をとぢ、口を少し開けて、痩せ細つたその手を苦しみのために打ち振つてゐる。
前夜、非常に高い熱がたうとう母の頭腦の忍耐力を押し破つた。
母は意識を失つた。言葉は母に通じなくなつた。自分は烈しく泣いた。
今、振り動かすその手を自分は自分の手の中に取る。
自分はその腕を撫でる。細い、皺のできたその腕の溫みが自分の手に傳はる。
永い仕事の用にたつたこの手の堅くなり、ひびの切れてゐるのを私は見る。
おお、廿七年の間、自分を育ててくれた母のこの手。
自分を抱き、自分を浴させ、自分を撫で、自分に乳と食べものとを與へてくれたこの手。
私はこの痩せ衰へた手に接吻する。
私は「お母さん、お母さん」と高く呼びかける。
母は眼を見ひらく。（おお、もうそれは生ける人の眼ではない。）
自分の呼聲は、遠く旅立たうとする母の魂を地上の古い巣の方へ振り返らせる。
母は自分の聲を、耳もとで呼ぶ聲を頼りに、もうこの世のものを見ることをやめたそ

の眼で、
すぐ傍にゐる自分の姿を探さうとする。
（この子をどんなに母は愛したか！）
しかし直ぐに力は盡き母は眼をとぢる。
もうこの世のものではない眠りが母をとらへる。

春の星空が涼しく燃え、深い夜が、
靜かに近づく曉の潮に道をゆづるとき
母の生命は、遠ざかる夜の衣に包まれて地上から去つた。
しづかにさし出た朝の日の擴がり流れる中に
おお、母の姿の
肅(しう)けさ、淨さ、神聖さ。
白髪のまじつた乏しい髪を頭の上にたばね、
かすかにひびの切れたその手を黑い着物の胸にくみ合せてゐる。
痩せた爲に額の骨は異樣に高く狹くなり、頰は落ちくぼみ、顳顬に短い灰色の後れ毛
が渦まいてゐる。
おお、この小さな額と頰との上に落ちる

朝の光の靜粛さ、
今朝、障子と疊とを照らす光は異樣に寒い。

（……私は三つである。私は母の暖かい胸の中に、羽ををさめた小鳥のやうに丸くなってゐる。
私の耳はうつとりと風と波とのひびきを聞いてゐる。
私の感覺はひろびろとした潮の匂に醉ってゐる。
眼にはぼんやりと白い汀の礫がつづいてゐる。
母と私とは海べにゐるのだ。
私は生れて初めて海を――廣い力强い神祕の海を全存在に感じてゐるのだ。（波の沫が私の頰を濡らす。）
母の眼が私を見てゐる。母の胸があたたかい。
母の髮の毛が風になびいてゐる……私は眠りに落ちる……

私は夜なかに目がさめた。（私は四つだ。）
いつも母と寢てゐるのに今夜は母がゐない。
私は姉と寢てゐる。私は母を慕つて泣く。

母は祖母が危篤で急に俥に乘つて田舍へ行つたのだ。
私はますます淋しくなつて泣く。姉は一生懸命であやすが私は泣きやめない。
そとには風が樹の枝を鳴らしてゐる。母はもう永久に歸つて來ないやうな氣がする。
寂しさに壓倒される。私は泣く。いつまでも泣く。)

目の前にはもう歸つて來ない母の姿がある。
六十年の航海の後で港に歸り着いた母の顏がある。
おお、自分にとつては何にも何にも代へ難いその一生よ。「母」の一生よ。
勞苦と、心勞と、血の出るやうな愛の本能と、內なるさまざまの戰と、犧牲と、
またそこにはいくらかの缺點の、母らしい利己主義と名譽心と弱さとのあつたその一生よ。
今は一切が淨化される。
一つ一つの思ひ出が自分の自我の最も奧底なる聖殿の中に
たふとき遺寶となつて安置せられる。
自分は母のなきがらに向つて心の中でいふ。
「母よ。二十六年のながいながい海のやうに底のない愛を心の底から感謝します。
母よ。これからも私をまもることができたら大きい翼のやうなあなたの愛のあたた

かさで私のゆくてを守つてゐて下さい。
母よ。あなたの愛の意義を思ふだけでも私は生き抜きます。
それを思ふとき人生は輝やかしいものです。
あなたが私の存在に對して持つ意味はこれからさき私の靈の奥殿に聖なる火となつて燃え上がるでせう。
母よ。あなたと私との交渉はこれから一層靈的なものとなりますね。

母上よ。
あなたは六十年の航海を今終りました。
それは勞苦と愛との長い旅路でした。
今、新しい岸邊は、あなたを迎へる歌に充ちてゐます。
新しい太陽はそこに照つてゐます。
あなたは微笑しながら港の土を踏みます。
あなたはまぶしがつてゐますね。
母上よ。」

母の死顔……最も慕はしく而も最も近づき難き美。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

それは神祕な微笑を浮べてゐるやうに見える。
死が作る彫刻の崇高さ。不思議な明るさ、嚴肅さ。
おお、花嫁よ。天に嫁ぐ花嫁よ。
自分の心は、全存在は、この底知れぬなごやかなものによつて洗禮を受ける。
私は家を出る。
太陽が森の頂きを照らし、
森は目ざめたばかりの鳥の饒舌でどよめいてゐる。
家の前の小川は
まだ蒼ざめたあけぼのの夢を見てゐるやうに
低い響でつぶやきながらしらじらと流れて行く。
私は近くの神社に行く。
陽の當つた濠のほとりで貧しい身なりの女の子が一人
落ちた眞紅の椿の花を拾つては長い絲にさして
花の鎖をつくつてゐる……

夕暮の海

蒼茫として海と陸とが暮れる。
なぎさにころがる波は
影の中を匍ひ
陸地に最後のひかりを探して
むなしくまた
暗い海へと歸る。

光はただ
向ふの岬の上をふちどつて
金緑の靜かな河となつて
ほのかに燃えてゐる。
また光は
天心の雲に

薔薇のかがやきとなつて花咲き
もろい莊嚴の一瞬を
今、支へてゐる……

雪舟

雪舟の繪を見てゐたら
空間の深さが身に沁みて來た。
霞と舟と巖と山と雪と樹木
寒さを耐へ忍んでゐると
心の底が不思議に暖まつて來る。
靜かさが俺を呼んでゐると思ふ。
がんとして動かない巖のでこぼこを
何か匂ひのやうなものが
包んでゐる。
花咲いた櫻の枝の間からつき出た
老人の顏は時を忘れた人間の顏のやうで
しかし鳥の聲は實によく聞こえるらしい。
顏のうしろの空間が

蒼々と歌ひ出す。

新しい空間

ものの内部に沈み込んで
暗がりに默つてすわつて
君はあたりを見まはした。
君は自分の、いひがたい苦しみを疊んでつかんで
その手の平から新しい空間を投げた。
そこで、冬のあかつきの
ほのぼの白い光のやうに
ものが、君の前でひろがつた。
お父さんから、おおいさんから、
いや、もつともつと前のお父さんから
君が最後に今、受けついだばかりの
古い親しい物たちのやうに
雜然と匂はしくならんで、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb